

倫理委員会セッション

学会等組織の倫理規程と組織構成員の行動 - 1F 事故後に改定した倫理規程からの検討 -
Code of Ethics of the Organization, including the Academic Society; and the Behavior of the
Organization Members -Consideration of the Code of Ethics that was revised after the 1F accident-

"社会に役立つ原子力技術の追求（行動指針第2条）"とは**～1F 事故を踏まえて～**

Pursuit of Nuclear Technology Useful for the Society

: understanding the AESJ's Code of Conduct, Article 2 -lessons learned from the 1F accident-

*大橋 智樹¹¹宮城学院女子大学

それは緊急地震速報から始まった。2 日前にも聞いた同じ音が、社会を大きく変える何かの始まりだとはまったく考えなかったし、それどころか 2 日前と同じく何も起こらないだろうと思っていた。とはいえ、幼少期に叩き込まれたことには自然に体が動くもの。閉じていたドアを開け、避難路を確保した。それもあくまで単なる“ポーズ”だった。カタカタカタカタという小刻みな振動は、突然、異次元のシェイクに変わった。地震だとわかる範囲で、しかし、経験したことの無いその揺さぶられ方に、恐怖よりも驚愕が勝っていたように思う。先ほどポーズで開けたドアからホールへ移動し、太い柱に抱きついたが、シェイクはまったく収まる気配をみせなかった。次第に揺れに飽きていった私は、ポケットからケータイを取り出してムービーを撮った。

2011 年 3 月 11 日 14 時 46 分。そのシェイクに遭遇した時、私は福島県富岡町にいた。町役場に隣接する「学びの森」で 14 時 50 分から講演をする予定で、その 4 分前のことだった。

あれから 9 年。日本のほぼすべての発電所を回り、原子力発電所を有するほぼすべての電力会社と対話をする中で、いま私は強い危機感をおぼえている。福島第一発電所は事故を起こし、福島第二発電所、東海第二発電所、女川発電所は辛くも大事故は免れた。原子力に関わる人たちは、あの日のそれらから何かを学び、自分たちの日々の業務に、なんとか活かしていこうとしている、とは思う。しかし、そこには温度差を感じる。

あの日の出来事から学ぶべきことはただ一つだと私は思う。すなわち、「人知を超えることは起こり得る」、当たり前なことだがこれに尽きる。しかし、想定外の想定内化は“人知を拡張すること”に寄与し、その結果として新たな、そして“あの時より想定外な”想定外を生んでいる。技術にとって想定が必要であることは誰もが知っているが、想定をする以上、常に同時に想定外も存在し続けることから目を背ける。人間は不安定を嫌う生き物である。未知は不安定の代表だから、未知から目を背けたがるのはある意味自然である。

本学会の倫理規程行動憲章には次の記述がある。「広く国内外の知見・経験に学び、学術および技術の向上を主導する。」

「広く学び」、「向上を主導する」ためには、まずは自らの中の未知の存在を認め、それを維持しなければならない。すなわち、自らを不安定な状態に保つことが必須なのだ。不安定を嫌う人間としての性に抗うことは容易ではない。しかし、原子力災害を二度と起こさないと誓うならば、その難しさを乗り越えねばならない。

本シンポジウムでは、いまどこにどんな課題があり、それらがなぜ危ないのか。福島事故以降も原子力に関わり続ける人々の課題について議論したい。

*OHASHI Tomoki

¹ Miyagi Gakuin Women's University